

# 心象風景

——霧に寄する抒情——

岡田和子

1. 序
2. ヘッセの場合
3. トーマス・マンの場合
4. ヘッセの孤独とマンの孤独
5. 源氏物語の場合
6. 終わりに

## 1. 序

ドイツ文学に接していると、時々、一体これは何だろうと思わずにはいられない奇妙なものに出会わす事がある。そして、それを追求していくと、結局古いゲルマンの神話に行き着くという場合が非常に多い。

例えば、ゲーテ。その詩に「プロメーテイス」というのがあるが、これはすぐにギリシア神話だと解る。ところが「忠実なエックルト」<sup>(1)</sup>という詩がある。これは一体何であろうか。これは、実は古いゲルマン神話の世界の住人なのである。グリムの『ドイツ伝説集』ではホツラ夫人の行列の露払いとして登場して来る<sup>(2)</sup>ゲーテという人物の中には、ギリシア的なるものとドイツ的なるものとが共存していて、前者はイタリア旅行においてルネッサンスの光を一杯に受け、瑞々しい花のように鮮かな開花を見せたので、こちらばかりが目につくが、その一方で、後者のドイツ的なるものも「木の下隠り逝く水」<sup>(3)</sup>の様にさわさわと、彼の精神の奥底を絶えず流れ続けて止まぬのである。

ドイツ的なるもの、ゲルマン神話の世界——それは正に、冷たい霧の立ち籠める世界である。周囲のすべてはその中に紛れ、薄明にぼんやり霞んでいる。

この光景を目の当たりにしたのは、ヴァーグナーのオペラ「ヴァルキューレ」においてである。そこは神々集う山頂の岩山。手前から奥へ、舞台は徐々に暗くなり、後方は無限の闇。全幕に渡って千切れ飛ぶ灰色の雲、灰色の霧。この山の頂きから馬でかっと一蹴りすれば、本当に雲の上の神住む宮居にほどなく行き着けるであろう……雲の激しい動きが山の冷気を実際に背筋に感じさせるこの渺々たる灰色の空間、霧が渦巻き流れる世界は、無理なくそんな事を思わせた――。

前置きが長くなった。要するに、ここで言いたいのは、霧の創り出すその神秘的な世界の事である。周囲のものの姿を失わせ、自分ひとりを中心に閉じ込め、取り残す。正に他の一切を排除して自分のまわりに立ち籠めるこの霧というものに、一種独特の雰囲気を含め、それに何らかの感情を託し象徴させるのは、洋の東西を問わぬ、古来からの、人の常なる感受性である。

霧に人は何を思うであろうか。霧が立つという自然現象を人は心理的にどの様に捉えるであろうか。自然科学的に解明された厳然たる唯一無二の事実も、人の心のプリズムを通して見ると、その示す様相は玉虫色になる。人により、或いは地域により、その捉え方は千差万別、微妙な差異が生じて来る。科学的真実に対するこの心理的真実こそ、人が人たる由縁なのであり、その微妙な差異が、周囲の事象を個人個人の色に、更にはひとつの地域的・文化的色合いに染め上げるのである。

丁度ここに、その「霧」を扱った三つの作品がある。いずれもまるで眺めた様に「霧」に託してその心の在り様を描いている。この所謂「心象風景」のための、霧は小道具に過ぎないのだが、それを通して描かれる三者三様の心模様が実に興味深く、面白い。

ここではその比較検討の対象として、ドイツの作品二つ、日本の作品一つを取り上げるが、前者の二作家は、同じ民族、同じ時代状況に直面しながら、その個人的色彩は、当然の事であるが、自ずと異っており、ましてや地域的に遠く離れた日本の場合、霧そのものに対する発想からして根本的に違っている。それらを蔽う霧の中に踏み込んだ時、そこに広がる風景は如何なるものであろうか。以下、その三者三様の霧の様相を追ってみたい。三者とは、即ちヘルマン・ヘッセ、トーマス・マン、源氏物語である。

## 2. ヘッセの場合

不思議だ、霧の中を歩くのは！  
どの茂みも石も孤独だ。  
どの木にも他の木は見えない。  
みんなひとりぼっちだ。

私の生活がまだ明るかったころ、  
私にとっては世界は友だちにあふれていた。  
いま、霧がおりと、  
だれももう見えない。

ほんとうに、自分をすべてのものから  
逆らいようもなく、そっとへだてる  
暗さを知らないものは、  
賢くはないのだ。

不思議だ、霧の中を歩くのは！  
人生とは孤独であることだ。  
だれも他の人を知らない。  
みんなひとりぼっちだ<sup>(4)</sup>

『青春詩集』に収められた、ヘッセの詩の中でも殊に有名な一篇である。一読してその深い孤独感が胸を打つが、この様な暗い思いに嘖まれて「人生は孤独だ」と謳うこの詩人の姿を、この詩の読者は一体何歳位に想像するだろうか。

この詩の初出は、「新進ドイツ抒情詩人」叢書の第三巻として1902年に出版された『詩集』である。この頃のヘッセは書店員の見習いをしながら執筆を続け、2～3の作品を世に送り出していたが<sup>(5)</sup> まだ文名が上がったとは言えない状態であった。つまり、まだ若い駆出の頃なのである。そのヘッセの才能を逸速く見抜いたカール・ブッセ——日本でも「山のあなただの空遠く」で有名である——の奨めに従ってこの詩集を編んだヘッセは、

当時 25 歳であった。

この年にして、もう彼は「私の生活がまだ明るかった頃」と言う。いや、25 歳ならまだ解る。この年になれば少しは世の物事も見えるようになり、人生の苦き杯も幾許かは飲み乾してもいようから。しかし、これに先立つ処女詩集『ロマン的な歌』に収められた 1895～98 年の詩の中でも、彼は死と孤独に憧れ、疲れた青春を絶えず嘆き続けているのである。まだ 20 歳にもならない時に、である。この年齢で既にこの様な絶望感を連綿と綴らねばならぬとは、これはまた何という青春時代であろうか。

ヘッセ自身『わたしの幼年時代』『わたしの生徒時代から』等で描いているが、彼の若い頃については、高橋健二『ヘルマン・ヘッセ—危機の詩人』に詳しい。それに拠ると、5 歳の頃、バーゼルの家の裏手に広がる草原にひとり寝転び「草原の孤独」に浸った<sup>(6)</sup> 9 歳でラテン語学校に入ると、我家とはまるで逆の「暗い暗いかわいしい悪の世界に触れ……うそつきと外交の術を覚えた」<sup>(7)</sup> そこも終わりの 13 歳頃には、心身共に不安な状態に陥り、カルプの森を散歩中「枯草に火をつけ、山林監視人につかま」る<sup>(8)</sup> 14 歳、マウルブロン神学校に入学。上気嫌に見えたのも束の間、三週間後には脱走騒ぎ。遂には「級友からも見捨てられ、孤立してしま」い<sup>(9)</sup> 半年で退学。この間、ピストルを買って自殺するという手紙を書く<sup>(10)</sup>……

ざっと見ただけでこんな具合である。彼をこの様な内的錯乱に追い込んだのは、「詩人になりたい、さもなくば生きていたくない」という、自分自身どうしようも無い、身の内から衝き上げる様なデモニッシュな欲求であった<sup>(11)</sup>彼もまた、ドイツ詩人としてデーモンと闘争しなければならない宿命を負っていた。彼の場合は、それが、円熟期の憑かれた様な創作の筆より先に、詩人として形を成そうとする思春期の若い情熱として、まず吹き出した。その後『詩集』を世に出し、25 歳で詩人として独り立するまで、ヘッセは、職工になってまでも<sup>(12)</sup>詩人への道を手探りする混迷の時期、深い「霧の中」を苦悩しつつ孤独に歩む時期を経験するのである。

この十代のヘッセの孤独の苦悩は余りに早熟に過ぎようか。また彼ひとりのものであろうか。確かに、或る程度人生の年輪を重ね、世間的分別もついた者から見ればそうもあろう。だが『青春詩集』<sup>(13)</sup>に謳われた若い心の苦悶、森に火をつけるのは異常であるにしても、父母や学校との軋轢から心がちぎれる程に思い悩み、周囲の一切が嫌になり、強烈な孤独感に噴

まれ、死にたいと本気で思い詰めるこの動揺は、これはもう万人のものである。

ヘッセの場合は、詩人になりたいという彼特有の天才的欲求が、この青春期の、傷つくことの恐しさを十分知っている、しかし人を傷つけることの恐しさはまだ知らない、無垢で、内気で、我儘な感情を、とりわけ激しく爆発させてしまう事になるのだが、行く手の見えぬ、何もかもがはつきりしない、不確かな「霧の中」に彷徨う孤独と不安は、早熟でも、彼ひとりのものでも何でもなく、必ずぶつかる若い魂の苦悩として、青春時代を持ったすべての人——否、青春時代を過ぎて後も、何の不安も無く、孤独感に嘖まれない者があるのか——の心に十分な共感を呼び起こす事ができるであろう。

ヘッセは、こうした「はみだし者」として若い時を送った。友人と時に小犬のようにじやれ合い、笑いさざめく無邪気な青春時代は、彼には無縁であった。その孤独な迷い多き心を、ヘッセはその後もずっと抱き続けていく。彼は生涯を孤独の中に流離い、不安の「霧の中」を歩き続ける。ヘッセの霧は「孤独と不安」の霧なのである。

### 3. トーマス・マンの場合

ヘッセの霧の心象風景が「孤独と不安」であるとすれば、トーマス・マンの場合はどうであろうか。『魔の山』第6章を見てみよう。

この年、スイスの或る山の上にあるこの療養所では、連日雪が降り続き、あたり一面灰色の深い霧に閉ざされている。ハンス・カストルブはそんな雪の中の生活を愛したが、一人きりになって瞑想し、かつ荒涼たる雪山ともっと親密に付き合いたいという強い願望から、たった一人、スキーで「灰白色の霧の中に消えて行く」<sup>(4)</sup>その彼の目に雪山はどの様に映ったか。

……念願の一人だけの世界にはいりこめたが、その世界はこれ以上ふかい静けさは考えられないほどの世界、不安な気持ちがかん臓をかすめる非情と危険の世界であった。……彼がはいりこんできて立ちどまっているのを、気味の悪い突きはなした態度で黙殺しているのであって、無言でおびやかす原始的

なもの、敵意すら持たない、むしろ無関心な危険なものという気持ち、まわりの世界から感じられる気持ちであった<sup>(5)</sup>

絶えず音も無く寂然と降り続ける雪、立ち籠める深い霧、無関心な静けさ——荒涼とした雪山のこの風景は、そのままハンス・カストブルの心の状態とだぶって見える。

彼は、平地と時間感覚の全く違うこの山での生活で、ここへ来る以前とはすっかり心持ちが違っている。一人になりたいと欲するこの時の彼の心の中には、クラウディア・ショーシャも、セテンブリーニも、ナフタも、他の誰の影もささない。唯真白い、思索の混乱に飽いた空白な心があるばかりである。それは丁度この雪山そのものだ。何の混り気も無く、ひたすらに白く染まり、霧により外界の異質物を全て遮断してその内的宇宙を現出している山の世界は、同時にハンス・カストブルの心の世界でもあるのである。

この雪山探索の少し前、彼の叔父がたずねて来る箇所がある。

ハンス・カストブルはほんの三週間のつもりでこの山にやって来たのだった。ところが山の魔力に捕えられて帰りたくなり、それきりここに居着いてしまう。そんな彼を領事の叔父ジェームズが連れ戻そうと山を訪れるのだが、久し振りに再会した甥の様子に、叔父は漠然とした不安を覚える。

領事はハンス・カストブルの顔を横からまじまじと見つめた。ハンス・カストブルは故郷の親戚のことも知人のこともたずねなかった。ジェームズがつたえた平地の人々の挨拶、そしてすでに連隊にはいって幸福と得意の絶頂にあったヨーアヒムの挨拶をつたえられても、ハンス・カストブルはあっさりとして礼を言って聞いただけで、故郷の様子についてはそれ以上何もたずねようとはしなかった<sup>(6)</sup>

到着したその日の甥の奇妙さに始まって、地上の生活では思いもよらぬ色々な事に耐え切れず、叔父は数日で逃げるように帰ってしまうが、このハンス・カストブルの無関心さが、雪山の、侵入者を黙殺する無関心さと二重映しになっている。叔父に対する彼の態度は「気味の悪い突きはなし

た黙殺」であり、「無関心な危険」である。山の寒さに慣れぬ叔父が寒さに震えるのを気にもとめず、故郷のことすら尋ねない。叔父にしてみれば「寒くありませんか」「皆元気ですか」と問う声を期待するのは当然であろう。山でない、平地の、普通の人間社会に暮らしているものにとって当然の事をしない、否、それどころかそんな事はまるで念頭に無くなっているハンス・カストルプは、正に自分の周囲で生きて活動しているものに対する「無関心な危険」に冒されているのである。

霧の雪山。実は、この時ハンス・カストルプは危く遭難しそうになる。猛烈な吹雪に道を失い、彼はこの山に永遠に飲み込まれてしまうところであった。これこそが、むき出しになったこの山の魔力である。それが、平然とこれ程の無関心さを露呈するまでにその力に深く捕えられて市民社会から隔絶してしまったハンス・カストルプを決定的に虜にしようと、猛然と襲いかかるのである。この時、誰もがこう思うにちがいない。ああ、もうこれでハンス・カストルプが我々の所に戻ることはないのだ、彼は永遠に隔絶した世界に留まり続けるのだ、と。

ここで、このちっぽけな人間を吹雪が取り巻き、更にその吹雪を取り巻いてひとつの閉ざされた球体の内部の様な世界を創り出しているのが、霧である。この頃のハンス・カストルプの心理状態と周囲の世界との間には、丁度この様な、互いを隔るぶ厚い霧の壁がある。その壁の向こう側の刻々と変わる世界の、すさまじい緊張をはらんだ生命エネルギーは、壁のこちら側の、しかも高い山の上にいる彼の所までは届かない。

彼がそのエネルギーを取り戻すには、ペーペルコルン氏の登場と大戦の勃発を待たねばならない。霧に閉ざされた雪山とハンス・カストルプの他人の思惑を締め出した心、山の無関心な静けさと彼の叔父に対する無関心な反応——これらは実に見事な対応を見せている。ここでは人を外界から切り離してこれまでとは別の人間にしてしまうこの魔力ある山の本体のようなものが、吹雪と、それを取り巻く霧として凝縮されているのである。

逆に言えば、この雪山の霧は、生命感を喪失し、自分以外の人間の影を宿していないハンス・カストルプの心象風景である。霧によって山を地上から隔絶させ、そこだけの閉ざされた内的世界を創り出すことによって、この「魔の山」にやって来て次第に現実感覚を失っていく人間の心理的隔絶を象徴しているのである。トーマス・マンの霧は、言わば「隔絶」の霧

である。

#### 4. ヘッセの孤独とマンの孤独

ヘッセの霧は「孤独と不安」であり、マンの霧は「隔絶」である。どちらも或る精神的状況が心象風景として映し出されており、そこには深い孤独の影がある。この孤独は何処から由って来たるものか。それは、一つには社会のアウトサイダー、はぐれ者としての意識、そしてもう一つには、常人には見えざるものが見えてしまうが故に返って身動きのとれぬ、一種のジレンマであるように思われる。

ヘッセの身を貫く孤独の思いは強烈である。それは放浪者の孤独である。同じく『青春詩集』にある「雲」という詩が語る様に<sup>(17)</sup>ヘッセは生涯を通じて孤独な放浪者であり続けた。

上述の書で、高橋健二氏は述べている。

放浪者はシュヴァーベン人の特徴の一つである。その点でヘッセは典型的なシュヴァーベン人である。あれほどふるさとへの愛着を表白しながら、彼ほど放浪の喜びと悲しみを身をもって体験し表現している人は少ない。(中略) 彼はいかなる流派にも属さず、いかなる団体にも加わらない。ひとり行くものである。放浪者は本来ひとり行くものだからである。<sup>(18)</sup>

放浪者であるが故に、猶一層切実に故郷を——それも魂の故郷を——恋うて止まない。しかし、その懐しい故郷に安住するには余りにも彼の本質はデモーニッシュであり過ぎた。その感受性は余人には捕え得ぬものを捕え、その捌口を求める。それは「自分自身の力に病む」<sup>(19)</sup>ほどに強いものであった。

ゲーテに「猷詩」という詩がある<sup>(20)</sup>そこではゲーテもまた濃い霧の中を歩いている。

そして道がのぼるにつれて 草地の流れから  
霧が縞をなしてゆるやかに湧き出した。



散るかと見えて霧はまた湧きぼくの周りを流れた  
やがて濃くなり翼のようにぼくの頭上に立ちのぼった (第2連)

そして、同じ様に自らの疾風怒濤の力を御しかねている。

ぼくの血の中にはある快活な意志が動いています  
ぼくはあなたの賜物の価値をよく知っています  
他人のためにこそぼくの心の中には気高い宝が成長して行きます  
ぼくは自分の才能をもう埋もらせることはできませんし埋もれさせたくはありません (第9連)

しかし、ゲーテには「あたりに縞をなして漂う軽々とした雲や霧」を「きよらかな薄紗」に織り上げてくれる存在があった。

すると彼女はあたりに縞をなして漂う  
軽々とした雲や霧の中に手をさし延べた  
彼女がそれを掴むと それは掴まれ 引き寄せられ いつしか霧は消え  
去っていた (第11連)

この「彼女」こそ「真理」の女神なのであるが、これが女神であるというのは非常に重要である。『ファウスト』の末尾に das Ewig-Weibliche(永遠に女性的なるもの) とある様に、ゲーテにおける至上の存在は常に女性である。彼は男性原理、即ち、破壊の力の危険性をよく知っていた。女性原理を載くことによって、ゲーテはドイツ詩人には稀有な精神的安定を得、他の作家の様にデーモンに一方的に突き倒されることが無かったのである。

ヘッセにはこの様な安定感はない。彼には道を示してくれる女神は存在しない。しかしその代わり彼の作品を貫いているのは、瑞々しいばかりの切ない懐旧の情、「過ぎにし方恋しき」<sup>(21)</sup> 思いである。ヘッセには、全身ずたずたになりながらその傷を柔かく両の手で庇い包み込んで労っている様な所がある。身の内から我が身を食い破る苦悩に血を流しながら、それに酔うて美しく涙している様な所がある。さもなくば、あれ程の思いをした

青春期にあれ程の遣る瀬無い慕情を寄せられるであろうか。辛いが美しくもあった少年の日こそ、あちこち追い求めて遂に帰つくヘッセの魂の故郷である。彼は晩年に至るまで繰り返し少年の日の思い出を書いている。そして僅か半年で去ったマウルブロンに限りない愛着を覚えている<sup>(22)</sup>それは『ナルチスとゴルトムント』を読めばすぐ解ることだ。これに限らず、彼の作品の、深刻さの中にも流れ続けるあの透き徹る様な切なくも甘い情感の美しさはどうであろう。まるで、流れそのものは見えないが、一際高く水音の響く清流の様である。それが彼の作品全体に溢れる哀傷として、人を酔わせ、惹き付けるのである。

では、トーマス・マンの孤独とは何か。

奇妙なことだ。フランスでは模範生が作家になるらしく、作家は模範生で補充される。——これはドイツとは違っている。ドイツでは新米作家はすでに学校時代に社会的にろくなものになれないことを実証するのが普通だ。とにかくフランスでは作家というものがドイツとは違うものなのだ。あちらでは社会的にずっとなじみがあり、公認されたもので、国家、社会の中で大いに栄達できる職業のコースなのだが、——ドイツでは全く無気味なもので、根本的に国家や社会の外にあり、以前に模範生だったとか調和とかいう観念はおよそ結びつき難く、また文学者たちが後に学問的な榮譽を受けるなどということもない<sup>(23)</sup>

『非政治的人間の考察』でも解る通り、トーマス・マンの客観的自己批判の厳しさは驚くばかりである。それはこの様な強烈な疎外意識に立脚している。マンはヘッセと違って多くの論文を書いた。それも「長篇を書きかけると、きまったようにその途中で」「小説の感興をそいでまで」<sup>(24)</sup>書くのである。その「情も容赦もなく、憎々しげな不逞さで、どんな小さな些事も決して見のがさ」<sup>(25)</sup>ない非情な物言い——これがトーマス・マンの孤独ではなかろうか。この乾いた口振で、彼は我と我身の暗部をその手でむきつけに割り出すのである。彼は満身創痍である。それは、しかし、ヘッセとは違う。ヘッセもマン同様己のために全身傷だらけである。だが、ヘッセはそれを哀傷の中に美しく埋没させ、白日の光の下で社会的・客観的に自己批判しようとはしない。

自分の恥部を自分で暴くというのは、それがコンプレックスの裏返しであれ、実人生を直視する勇気であれ、如何に鋭くその恥部を意識しているかという事の逆の表明に他ならない。本質的に詩人のヘッセと生粋の小説家たるマン。一方はひたすら「内面への道」を辿り、一方はイロニーたっぷりの嗜虐的自己批判へと進む。一口に孤独と言っても、ヘッセのそれが、抒情詩においてより美しく謳われた、自分の傷を抱いて愛しむ、春の雨の様に柔かい、湿り気を帯びた主観的な孤独であるのに対し、マンの場合、小説・論文の硬質な文体が示している様に、客観性が強い。あからさまな陽の光にその鋭く削り取った傷口を晒してなお毅然としている、冷徹な乾いた孤独である。芸術家は社会的に疎外されたる者という意識が、ドイツ人という特異なアイデンティティと相まって自己批判の眼を厳しくし、醒めた眼で常人の見えざるものを捕え、それによって増々周囲と隔絶し、同化する事のできない自分を見い出さざるを得ない。

この二つの深い孤独の泉から、一方の霧は果てしない迷いに満ちた哀傷となって立昇り、もう一方の魔の山の霧は、周囲から人を隔絶するふ厚い壁となって立ちはだかるのである。

## 5. 源氏物語の場合

では、日本の場合はどうだろうか。霧による心象風景としてこれ以上うってつけのものは無いという場面が、源氏物語の明石の巻にある。

源氏 27～8 歳。須磨流謫から帰って間も無く、彼は京の邸で紫の上の傍にいながら、一方では飽かぬ別れをしてきた明石の上のことをずっと心に懸けている。そして彼の地から届いた誠実まことやかな文に心碎かれ、次の様な歌を書き送るのである。

嘆きつつあかしのうらに朝霧のたつやと人を思ひやるかな

「あかし」には「夜を明かす」に「明石の浦」と「明石の方」が掛詞になっていて、嘆きながら夜を明かしておられるあなたの溜息が明石の浦に朝霧となって立つのであろうかと、あなたをはるかに思いやっています<sup>(26)</sup>

というほどの意味である。

ここには、嘆きが霧となって立つという古い日本の発想が色濃く引継がれている。<sup>(27)</sup>万葉集にも、

大野山霧立ちわたるわが嘆く息<sup>おき</sup>嘯の風に霧立ちわたる (799)

君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ (3580)

等の歌が見えている。

古代日本では霧は息 (= 生き) と同じものとされ、生命の根源と見られていた。<sup>(28)</sup>『古事記』の、天照大御神と須佐之男命が天の安河をはさんで誓約<sup>ちげ</sup>をする話は、その事を如実に物語っている。須佐之男命は姉の天照に何の害意も持たぬ証拠として、誓約をして子を生むことにするのだが、その時二神は、身につけていた互いの持ち物を「さがみにかみて、吹き棄つる気吹<sup>いぶき</sup>の狭霧」から神々をお生みになった。そして、それら新しい神々の筆頭が霧の女神、即ち生命を司る女神である多記理毘売の命だったのである。<sup>(24)</sup>

この事から見ても、霧というものが「生命の息吹」とされ、生あるものの持つ生命力そのものとして捉えられている事が解るのであろう。古代日本人はあらゆる自然物に生命を見、それ故、人と自然の間には或る種の「交感」が存在した。伝統的な日本の思考は、西洋のように人間と自然を鋭く区別し対立させるという事をしない。人の精神と周囲の自然物は情趣的に融合し、人間の心の動きは、そのまま自然物の動きとなって眼前に現われるのである。これは最早、心理状態の投影などという曖昧なものでは無い。人間と完全に同一化したもの、心そのものなのである。

折しも秋、帰京間もない源氏は、紫の上を尻目に明石の上に思いを馳せている。彼の脳裡には、ついこの間まで夜毎夜毎にその耳元で聞いていた、かの心様深く美しい女人<sup>ひと</sup>の深い溜息がよみ返っている。別れの夜に初めて聞かせてくれたあの琴の音、唯々悲しそうだったあの様子——自分が去った後、あの浜辺には今頃佳き人の嘆きの溜息が霧となって立昇っていることだろうと思うと、源氏は霧の息をその膚に直に感じ、明石の上の愛執が身に纏い付くような心地に襲われたに違いない。古代日本における霧は女

人の「嘆きの霧」, 「君待つと吾が恋居」<sup>(30)</sup>の女人の漏らす, 切ない思いの吐息なのである。

因みに, アーサー・ウェーリーは源氏物語のこの箇所をどの様に英訳しているであろうか。

At Akashi is all night spent in weeping ? And do the mists of morning hide the long-looked-for light of day ?<sup>(31)</sup>

この歌は, 浜に立つ霧という叙景の表の意味に隠された, 女の嘆きの霧という裏の意味こそが, その眼目である。それなのに, この英訳ではその肝心な明石の嘆きが十分に表出されていない。難解な平安朝の古文を巧みに訳したウェーリーも, 自然と人の心の一体となった情感の発露までは理解が及ばなかったのかも知れない。

## 6. 終わりに

我々はこれまで, ヘッセ, トーマス・マン, 源氏物語における霧に託された心の様相を追ってきた。そして, そこには三者三様の心象風景が展開されていた。

ヘッセの霧の中には, 傷ついた孤独な放浪者の不安が包まれている。現在の身の置き所もなく, 未来への視点も定まらぬ八方塞りの状態。これが, 『霧の中』という一篇の詩に託された, デーモンに翻弄された彼の青春期の苦悩の在り様である。しかし, その時にはどれほど耐え難く思われたにせよ, 過ぎてしまえば波間に一瞬光をはじく銀鱗の煌きにも似ている, だがそれ故にこそ, いつまでも強い刻印を残し, 時がたつほどに美しさを増し, 精神の中に大事に包み込まれて生き続けていく——その後の作品を読む限り, 彼の青春の苦悩とはその様なものであると感じられる。

一方, マンの霧の中には, 他人の影響力の一切及ばぬまっさらな広い空間の中で, 唯一人ぼつねんと立ち尽くす人の姿がある。それは大自然の中に置かれて余りにも小さい, 唯の一つの点である。そこで彼は内省に耽る。周囲の世界に対する自己の内的世界を思索し, その裂け目を, やがて彼は,

ヘッセみたく心の中で大事に培養するような事はせず、人目に晒してより深く剖って良しとするかの様な、鋭い客観的・社会的自己批判の方向へと押し進めていく。

これに対し、源氏物語の霧は女性の苦しい恋心の流露である。そしてこの場合、「嘆きの霧」という観念が民族的に共通な広がりを持つものであるということ、そして、霧と人との結び付きの在り方が、単に心情の仮託というには余りに強い、一種の交感感情によって一体化する程に密接な内的連関を有しているということにおいて、先の二者と比して特徴的である。

ドイツの霧にはこの様な民族的共通観念はないのだろうか。ヘッセとマンの霧に共通性があるとすれば、それは「精神的不透明さ」である。どちらも何かふつきれない、目先をくもらされた状態が、そこにはある。

グリムの辞書で Nebel を引いてみると、霧の比喩的・象徴的用法という項目があり、

肉眼、ないしは精神的視線の展望・洞察を曇らせるもの、惑わすもの、欺くもの、あやふやなもの、はっきりしないもの、間違ったものに関して比喩的に用いる。また、関係がはっきり定まらないまま、人を迷わせて不安にさせるものに関しても同様に用いる。<sup>(32)</sup>

という説明がなされている。つまり、人に正しい物の姿を見失なわせ、踏み迷わせるものの総体が、ドイツにおける霧なのである。

ヘッセの霧も、ゲーテの霧も、マンの霧も、正にこの通りである。それは非常に精神性の高いものである。日本の場合、精神的というより感情的である。長い日本文学の伝統においては、恋をはじめ、種々の喜怒哀楽の心情と離れた叙景は存在しなかったと言っても過言ではない。日本の景物は人の感情と不可分であり、心情の比喩というよりむしろ心と同一化したものである。比喩とは、異質な二者があり、そこに何らかの類似が存在しなければ成立しない事を考えると、自然と人との間に同質性を認め、断絶を感じなかった日本の場合、やはり比喩とは趣が違うであろう。

これに対し、ドイツの場合は明らかに比喩である。感情よりも精神の方に比重がかかり、それも「人を欺く」という一点に集約されている。日本の霧が感情的に恋の嘆きの吐息を表わすものであるならば、ドイツの霧は

精神的にその不透明さ・不安さを表わす傾向があると言えるであろう。

それにしても、「思いの吐息が霧となって立昇る」というのは、近代的な理性に爰に啓蒙されていない、人と自然の間に何の垣根も無い原点の発想であるが、この「嘆きの霧」、自分に思いを寄せる女性の遣る瀬無い溜息の中にすっぽり包まれるというのは、実際どんな心地のするものであろうか。そして、自分としては、決して身轟屑するつもりは無いが、この古代日本の抒情にやはり心惹かれる。最早現代に生きる我々からはかけ離れた、異質の感覚ではあるが、いや、むしろそれ故にこそ、女人の「嘆きの霧」という発想を類なく美しいものと感じ、思わず「嘆き」ならぬ「賛嘆」の溜息を発してしまうのである。

### 【註】

- (1) Der getreue Eckart 人文書院版ゲーテ全集Ⅰの注(s. 402)によると、「1813年4月17日、テブリッツへの旅行の途中エッカルツベルクで秘書のヨーンが『テューリンゲンの森のおとぎばなし』であるこの幽霊物語をきかせたので、早速ゲーテは詩に書き上げたのだという」
- (2) Brüder Grimm, Deutsche Sagen Nr. 7
- (3) 秋山の樹の下隠り逝く水の吾こそ益さめ御念よりは(万葉集 92)
- (4) 高橋健二訳ヘッセ全集 10『孤独者の音楽』新潮社 1983 s. 136。以下、ヘッセの詩の引用はすべてこれに拠る。
- (5) 1899(22歳)『ロマン的な歌』『真夜中後の一時間』, 1901(24歳)『ヘルマン・ラウシャーの遺稿の文と詩』
- (6) 高橋健二『ヘルマン・ヘッセ—危機の詩人』新潮選書 1974 s. 26 f.
- (7) 同書 s. 36
- (8) 同書 s. 43
- (9) 同書 s. 53
- (10) 同書 s. 55
- (11) 『ロマン的な歌』に収められた「私は星だ」という詩から、その衝動の強さが窺われる。

私は大空の星だ。

世界を見つめ、世界をあなどり、

自分の熱火に焼け失せる。

……………

私は無言の情熱だ。

家ではかまどがなく、戦争では剣を持たない。

自分の力のために病んでいる。(→註4, s. 233 f.)

- (12) 高校を退学し、勤めた本屋も3日で逃げ出したその翌年の1894年、17歳でペロットの工場の見習工となる。「幾年も古典語を勉強した神学生が、無気味な病気にとりつかれたもののように白眼視されながら、機械工場・大時計製作所の徒弟となって、万力や施盤に立ち向かって肉体労働をしたのである。つらいことであつたにちがいない。しかしその失意の中から立ちなおる力がわいて来た。悲しいけれど、『改善への第一歩』がなされた」(→註6, s. 61)
- (13) 1902年の『詩集』は1950年から『青春詩集』と改題された。
- (14) トーマス・マン/関泰祐・望月市恵訳『魔の山』岩波文庫1979 s. 226。以下『魔の山』の引用はすべてこれに拠る。
- (15) 同書 s. 227
- (16) 同書 s. 152
- (17) 上掲書(→註4) s. 241

長い旅路にあつて

さすらいの悲しみと喜びを

味わいつくしたものでなければ

あの雲の心はわからない

(第2連)

私は、太陽や海や風のように

白いもの、定めないものが好きだ。

それは、ふるさとを離れたさすらい人の

姉妹であり天使であるのだから。

(第3連)

- (18) 上掲書(→註6) s. 34 f.
- (19) →註11 参照。
- (20) ゲーテ全集1 人文書院 昭和51 s. 82~86
- (21) 『枕草子』30段「過ぎにし方恋しきもの」
- (22) 上掲書(→註6) s. 47
- (23) トーマス・マン全集X 所収『パリ訪問記』新潮社1972 s. 291
- (24) 大山定一『文学ノート』所収「トーマス・マン論」筑摩書房1985 s. 293



- (25) 同書 s. 300
- (26) この訳は、手元にあった大学受験参考書の白子福右衛門『文法詳解源氏物語清釈』(中)s. 188～9から採った。理由は、以下本文で述べるように「嘆きの溜息」と「霧」の同一性がよく解る訳だからである。この部分、岩波の日本古典文学大系では「秋に別れて以来、夜は嘆き明かし、朝は一人夜を明かして、明石の浦に君が立ち物思いに沈んでいるかと、私は君を思いやって居るよ」、小学館の日本古典文学全集では「あなたが嘆き嘆きして夜を明かす明石の浦には、そのために朝霧が立っているだろうと思いやっているよ」となっている。後者はまあまあ意が通ぶるが、前者では「嘆き」と「霧」の関係がつかめない。
- (27) 日本古典文学全集『源氏物語』(二)小学館 1972 s. 264, 注(六)
- (28) 岩波古語辞典 s. 383
- (29) 日本古典文学全集『古事記・上代歌謡』小学館 1973 s. 76 f.
- (30) 君待つとわが恋ひをればわが宿の簾うごかし秋の風吹く (万葉集 488)
- (31) The tale of Genji : a novel in six parts by lady Murasaki, translated from the Japanese by Arthur Waley, volume one Oxford 1973 p. 283
- (32) Grimm, Deutsche Wörterbuch VII 476 2) の b)

## 参 考 文 献

- 1 Hermann Hesse Gesammelte Schriften Suhrkamp Verlag Zürich 1968
- 2 高橋健二訳「ヘッセ全集」全10巻 新潮社 1983
- 3 高橋健二『ヘルマン・ヘッセ—危機の詩人』新潮選書 1974
- 4 B.ツェラー/井原恵治訳『ヘッセ』(ロロロ伝記叢書)理想理 1981
- 5 井手貴夫・青柳兼二訳『ヘッセ=マン往復書簡集』筑摩書房 1985
- 6 Thomas Mann Gesammelte Werke in Einzelbanden Fischer Verlag Frankfurt am Main 1981
- 7 「トーマス・マン全集」新潮社 1972
- 8 トーマス・マン/関泰祐・望月市恵訳『魔の山』岩波文庫 1979
- 9 K.シュレーター/山口知三訳『トーマス・マン』(ロロロ伝記叢書)理想社 1981
- 10 辻邦生『トーマス・マン』(20世紀思想文庫 I) 岩波書店 1983

- 11 菊盛英夫『評伝トーマス・マン』筑摩書房 1977
- 12 洲崎恵三『トーマス・マン—イロニーとドイツ性』東洋出版 昭和 60
- 13 大山定一『文学ノート』筑摩書房 1985
- 14 手塚富雄『ドイツ文学案内』岩波文庫 1980
- 15 「ゲーテ全集」人文書院 昭和 51
- 16 日本古典文学大系『源氏物語』岩波書店 1979
- 17 日本古典文学全集『源氏物語』小学館 1972
- 18 白子福右衛門『文法詳解源氏物語清釈』加藤中道館 昭和 50
- 19 日本古典文学全集『古事記・上代歌謡』小学館 1973
- 20 日本古典文学大系『万葉集』岩波書店 1979
- 21 斉藤正二『日本の自然観の研究』（上）（下）八坂書房 1978
- 22 津田左右吉『文学にあらはれたる国民思想の研究』第一巻 岩波書店  
1975
- 23 大西克礼『幽言とあはれ』岩波書店 昭和 46
- 24 芝烝『古代日本人の意識』創元社 昭和 61
- 25 『岩波古語辞典』岩波書店 1974